

音を聴く皮膚

安永圭子詩集



コールサック社

詩集
音を聴く皮膚
安永圭子

コールサック社



9784903393964



1921092020006

ISBN978-4-903393-96-4

C1092 ¥2000E

コールサック社
定価：[本体 2,000円] + 税

表紙画
安永圭子

哀の背は愛、愛のとなりは哀。

それは生きているものすべての透視図。

端正な場景表現。多様な心層の見事な織模様の詩群。
らと円居して安らかな心になるのは私だけではない。

山本十四尾

コールサック社

コールサック社

- 『原爆詩一八一人集』（日本語版・英語版）各2,100円 長津功三良・鈴木比佐雄・山本十四尾＝編
第18回富沢賢治学会イーハトーブセンター「イーハトーブ賞奨励賞」受賞
- 『生活語詩二七六八集 山河編』2,100円 有馬敏・山本十四尾・鈴木比佐雄＝編
- 『大空襲三一〇人詩集』2,100円 鈴木比佐雄・長津功三良・山本十四尾・郡山直＝編
- 『鎮魂詩四〇四人集』2,100円 鈴木比佐雄・菊田守・長津功三良・山本十四尾＝編
高炯烈著・韓成禮訳『長詩 リトルボーイ』2,100円
- 中原澄子詩集『長崎を最後にせんばー原爆被災の記録ー』2,100円 第45回福岡県詩人賞受賞
上田由美子詩集『八月の夕凧』2,100円
- デイヴィッド・クリーガー日英語詩集『神の涙ー広島・長崎原爆 国境を越えて』1,500円

詩集 音を聴く皮膚

安永圭子

●
コールサック社

詩集 音を聴く皮膚

目次

I章 音を聴く皮膚

音を聴く皮膚

初夏の蛇

木精こだま

さびしい庭

静かな夕べ

壇の中

扉の中のグラス

老女の日日

月 齡

木 靈

10

14

16

20

24

28

32

36

40

44

II章 海辺の情景

しだれ桜の景

琵琶湖の十一面観音

海辺の情景

夏の終り

おちた蝶

高野山奥の院

深大寺十三夜祭

晩秋の沼

旅

桑の木

50

54

58

62

66

72

76

80

84

86

Ⅲ章 彼岸花

彼岸花

母の背中

白綸子りんすの小袖(一)

白綸子りんすの小袖(二)

野馬が駈ける

ふる敷

ヒユルヒユルと咽を通る

飛べ、飛べ、自転車

居場所

彼方の青

冥界からきた蛙

92

96

100

102

104

108

112

116

120

124

128

あとがき

132

略歴

134

詩集 音を聴く皮膚

安永圭子

1章 音を聴く皮膚

音を聴く皮膚

火傷やけどがなおったばかりの手の甲が
いつの間にか真赤になりけいれんしている
皮膚は覚えていた容赦なく襲った熱を
シタール奏者は激しく弦を爪弾つまびきつづけた
ラビジャンカールの「夕陽のラーガ」*1を
会場はくりかえし打ち寄せる波のターラ*2に熱い海となった
聞き入るわたしは沈む光の飛沫しぶきに
全身をぬらし海底に引き込まれてゆく

ラーガとターラのいのちは
新しい皮膚細胞と合体し痛みの振動になった
音がうねる 刺さる
左手で右の腕をかかえこみ蹲うつくまっても
肘から肩へ頭へと受け入れた海は鎮まらず
波は強くなるばかり
一瞬自分を失ったとき
波間をよぎる魚の群を見た
それは聖なるガンジス河の水と共に
インド洋の黒潮にのってやって来て
水平線上に沈む陽に染まったターラの魚たち
ふとラーガの海に浸した手の表皮から
時空を越えてすばやくはいりこみ
熱情の尾びれをはねあげ
腹をくねらせて細胞と交合したのだ

魂がふるえ歓喜することが痛みとなる残酷さ
耳をふさぎ音をさえぎっても
皮膚は感応し音を聴いている

耳の不自由な人たちが
大きな風船を両手で抱いて
演奏を聞いているのをみた
掌が音を受けとめ震える
耳というオルガンがなくとも
目で指先で足裏で音を感じている

今わたしの手の甲も

*1 ラーガインド音楽の旋律

*2 ターラインド音楽のリズム

初夏の蛇

カラス達の鳴き声がやんで
鳥の巢の卵をねらっていた青大将が
ドサリと落ちた

木をゆすっていた乙女は
蛇を抱きあげ
つるつるして 冷たくて
気持ちがいい と
目を細めほおずりする

蛇はコトコト鳴き声をあげ
細い舌を出した

都会の思いがけない林にある
時間の吹きだまりを
連れた藪をほどこきながら
なま暖かい風がわたる

幻影に似た妖しい光景
ぬるりとすべり消えた蛇は
乙女の胸と腕に
赤い鱗の斑点を残した

木精 こだま

黄落のカーテンを分け

呼ぶ声を聞いた

明け方の夢の路に立つ大銀杏

幹に渦巻く瘤こぶのあたりか

それとも大地に張った根元あたりからか

たしかめようと夢を追いかける

つかまえそこねた夢ゆめのあと

朝の光の中で過ぎた時をたぐる

農家の庭に銀杏の木があつて

数多の歳月をかけ

どこまでも高く逞しく伸びていた

田園地帯に一本だけのこの巨樹は村の目印となる

家を火から守り金色の実を降らす木として愛され

だれとも季節のあいさつを交わしあう

この家で育った少女は当然のように

日々木の下に立ち見あげ親しく話しかけた

都会への思慕と夢や楽しみを

時には心ない争いや悲しみ怖れを

さし交わした枝は浅緑の葉をひるがえし

答えのようなものを送ってきた

夏の闇に樹の広い背中で人を好きになり

豊かな実りの鈴が鳴ると祭りの縄を巻き祈った

時がくれば戻るつもりだった故里
思い出を確かめに立寄る

荒れ果てた無人の庭に銀杏の木は立っていた
枝も幹の先端も伐られた姿で

もう両手いっぱいに抱きかかえても呼びかけても
樹液の流れる韻は聞こえてこない

だがくりかえす夢で

聞こえてくる声

さしのばした両手と 黄葉の中

さびしい庭

古い家を取り囲む庭木
枝を重ねあわせ繁茂する葉が降りこぼす
陽光ひかりの糸を唾くわえて鳥が飛び交う
尾を上下させ鳴き合う
舞踊とデュエット
緑濃い小さなホールは
生活たつきから放たれ鳥と無心に遊びひと呼吸する場所
花が終り木々だけの薄暗い庭に
日がな心に向ける一日

生き物の息遣いが毛細血管に優しく忍び込む
けれどもその庭に
時たま踏み入ってくる野良の白猫たち
散乱する羽根と食い千切られた鳥の足
又もやっただか

斑に伸びた芝生で
野鳩の肉でふくらんだ腹の二匹の子猫は
コロコロと戯れ駆け廻っている
樹の陰で目を細めている母猫

死骸の羽毛を風が吹きあげる
重なる無惨な光景に
悲鳴をあげ竹箒を振りあげた

追いこんだ物置の床下
抜け道のない狭い空間を強かに^{した}払う
ひと握りの呼吸が消えた数秒後 猫は
白い毛をさかだて 物怪のように
飛び出し 駆けぬけた

そんなに嫌うな わたしの柔らかな心よもどれ

引越し間近

朽ちた物置を取り払うと

地面に晒されて

猫の形のまま白い毛と皮だけを残した屍体

庭では親そっくりに育った二匹の猫が

無邪気に毛づくろいをしている

静かな夕べ

玄関をあけると
隣家の坊やが立っていた
ティッシュに包んだ小鳥の卵を
私の前に差し出して
「巢から落ちてたの どうしたらいい？」
と訊く

ムク鳥が小枝を唾つよえてきて
家の脇の花水木にせっせと巢をつくっていた

オスとメスが忙しく電線の上ですれちがう
鳴声を交わしながら営みをつづけ
葉を繁らせた枝に
わずかな春風にも落ちそうな
つつましい巢をつくった

卵を抱く母鳥
その姿を見た者は
挨拶がわりに人に教える
「あたためているよ」
枝の下でいつもどおり繰り返される
気を遣わない視線とおしゃべりの散歩
登校下校の小学生達も指を差す
「尾がみえる いる いるよ！」
そのたびに鳥は飛び立ち

電線に止って甲高く鳴いた

ある日卵は地面に落ちた

母鳥が巣からけ落したのか

そのまま飛び去り帰ることはなかった

巣の下の草むらで卵をひろったキミは

ふた晩箱に入れ抱いて寝たと言う

付き添う若い母親の困惑顔と共に

卵は私に渡されようとしている

「私は母鳥にはなれない

その卵はキミの家の庭に埋めましょう」

それから私は何も言わないで土を掘り

キミは掌の中ににぎりしめていたものを

ポトツと穴に入れ

小さな手を合わせた

このできごとが心に残っているあいだは

キミの耳に巣の中のみえない雛の声が聞こえているだろう

夕暮れが花水木の影を消しはじめると

沈黙の月が満ちた

壘の中

庭の窪みに放置され
半分泥に埋まった広口のジャムや酒壘から
はい出した蛙やかげ みみず
蜂が巣をつくっている壘もある
ゆらぐ陽射しに懸命に動く小さな生きものを眺めていて
ふとよぎったのは津波災害の記事による
ある少年の言葉だった

——安全な壘の中に住みたい

海にかこまれた南の島 千の数の島島
真白な砂浜に

海水が黒く盛り上がり高く盛り上がり
押し寄せた

“ゴ—”という音と共に自然の攻撃は
おおくの家や人をのみこんだ

島民達は高台に丘に向かって走った
教会が建っていた

どんな破壊にもゆるがない姿に見えた
礼拝堂の扉は天使の翼のように開かれ
天井と窓のステンドグラスは青く光り
生と死をつなぐ虹色の腕をさし出している

全身傷だらけになって辿りついた男は

巨大な悪魔の舌に巻き込まれたと

うつろな目を聖なる像に向けた

両腕を広げ床に五体を投げ出して顔を伏せている女

渦が抱いていた子どもをさらっていった

泣き叫び神に呼びかけている

瞑目しどれほどの男女が哀しみの手を合わせただろう

すさまじい残骸のあとにたつ

慰霊の十字架は山ほどの花で埋もれていた

身寄りのない子ども達が絵を描いた

真黒なクレヨンで紙を塗りつぶした子

あるいは泥に埋もれた家や両親友人を描いた

安全な壕の中に住みたいと云って

ガラスの壕に入った家や田んぼを描いた少年

恐怖や孤独と闘いながら幼い命は
一心にガラスの箱舟を神に求めたのだった

(スマトラ沖やソロモン沖地震の新聞記事より)

扉の中のグラス

駅前銀座通りのゆきどまり
なぜかここが世界の果てと思ひこんだ者が
たどり着く小さな酒場
暗すぎる電灯が怪しく人を招きよせる
部屋の形をゆがめているタバコの煙
ふやけた板カウンターの上に置かれたグラス
お前だけが明るくかがやいている
高熱の窯で命をふきこまれ形を整えられたスマートな立ち姿を
いくつもの掌が握りしめ注ぎ入れた水に世間を写し

じっと見詰めている
こわばった心を柔らげようと揺らしても
無意味に饒舌になった高声を響かせ
心ない争いに巻きこまれひび割れても
お前はけなげに
すべての思いを受けとめようとして布巾で身繕いし
いつそうぬけるような透明さになって立つ
人は短い夜の時間
扉の中の奔はなに落ち込みに来てお前と向きあう
白いシャツが好き社会との闘争の風をはらみ
歌声喫茶で肩をくんだ青春
鯉こいだしの醤油ラーメンを食べ
アメリカンドリームの映画をみた
謙虚に道を信じ歩いてきても

はじき出され胸が苦しくなった時
この扉が開いていてお前が待っていた
魅惑の水に自分の分身を投げ入れ
カクテルスティックで攪拌かくはんすると
渦を巻いて融け込みエモーションが酔奏曲をかなでる

どれほどの時が流れたのか

駅前通りに人影はない

ここは暗い酒場へつづく路地

扉は閉ざされたまま

若い物語の頁をひきずり

夜風がすぎなく通り過ぎてゆく

老女の日日

三方がガラスの小部屋
はじめに入つて来たのは梅
次いで桜があふれ 紋黄蝶をつれた菜の花があふれ

とろけそうな春の日

老女は

日向に座つてうつらうつらするばかり

それはふいに起きたドラマ

窓外の忘れられた空から

降ってきたもの

庇の上で寝ていた野良猫の垂れた黒い尾に

蛇がかみつき巻きついた

変哲もない真昼の空気をやぶる鳴き声

もつれた塊は落下し

左右に離れて消えた

老女の眼は一瞬怖れに見開かれたが

やがて何事もなかったように居眠りをする

イチヨウの木の下に置いた石

老女は何を思うのか

その上に毎日卵をそなえひざまず跪く

知らぬ間に蛇がやってきて

卵は消えてしまう

石のくぼみに夕陽があふれたとき
独り住いの部屋から低い祈りの声が流れて来た
繰り返し 繰り返し
庭にひそんでいる生きものの影に向かつて

月 齢

月の靈波を

額に感じている

なんらかの通信に

じつと息をつめていると

「水辺の桜並木で待っている」

かすかに囁きがつたわってきた

二日月からの

気がかりな誘いをにぎりしめ

高層マンションや新興住宅街の

夜空の隙間を覗きながら

歩きまわる

約束の並木道

冬のあいだ封じこめて来たいのちを

はじき出そうと

花の芽も川面もふくらんでいるのに

時と空のあわいはおぼろで

月の姿はみえない

鎌より細い清麗な曲線は

どこにあるのか

額の意識もぼやけ

感応することが出来ない

川原の広い空間にたちすくみ
イマージュの月を思いの胎からのぼらせる

閉じたまなこを透して

薄闇に

柔らかく揺れる梢がある

漂うかすかな香り 時ならぬのに

いっばいに広がる花をつけた

枝に腰かけお待ちしていましたと さし招く幼い精霊の手

月を求めて気がついたらここにいる

流れる水に誘われて咲く花に誘われて

ここまでやってまいりました(道元)

木 靈

深山の廃屋がざわめいている
闇の中に人を追いこんだあと動き出した
熊の爪あとが残る土蔵の壁に影をうつす
風もないのに妖しく揺らいでいる樁の大木
藪と低木に続く原生林に向け音を発している
眠れぬ眼がまばたきを忘れ凝視めた

太い幹の中程で数本に分かれた枝を
何度もくねらせねじれたさま
コブが抱く暗い洞が不気味ににらんでいる

さけた樹肉が白い牙をむいている
おびえ ふるえた
竜だ

落人の隠れ里にある崩れかけた土蔵
それより古くからここに立っていたやぶ椿
百年をこえた老木は精霊を宿らせるといふ
怪しく呪文めいた声が流れてくる
濃い緑の葉を広げたこの木をだれもが慕うと
集まって来た生きものが囁きあう
熊 鹿 狐に兎と蛙 猪や狗も
みんな真昼に森であつた樹木ではないか

終日炭焼の老人に案内され
しつとりと湿つて柔らかい道に足を沈めながら歩いた

奥へ奥へと分け入っていった北信濃の小暗い森

ブナ ヒバ スギ ウルシ カエデ

重なり合った緑 天をめざし高く伸びる巨樹

音たてる生氣 匂いたつ青灰色の幹

ひたむきに掌をあて耳をあてる

霧の中から 樹は

ふいに熊の姿で現れた

黒ずんでしまった裸身は

枯れて半分折れたまま立っている

ボロボロに荒れた鱗状の幹

かすかに射しこむ光の先

抱きあつて横に倒れてしまっている樹が

行く手をふさぐ

のたうち這っている蛇なのか

もつれあつた枝が足首をしめつけ

体に巻きつき動くことが出来ない

このままここに閉じこめるつもりか

朽ちても獣に姿を変え森を守る樹の蔭で

ふいに木霊の声を聞いた

立ち入るな

夜半青墨を流した空の下で

中国の莊子が述べたように

八千年先の春に花開くため

獣たちをしたがえ

老椿は佇ちつづける

痺れた 心ごと実の形でひざまずくこの身は

霊の妖手につかみとられ

蛇ともなってみどけようか

II 章 海辺の情景

しだれ桜の景

未^す枯^がれた植物園

葉を散りつくしたしだれ桜の

地面に傾^なれる枝はまるで白骨のよう

道をはさんで初老の男が

カメラの三脚をすえている

まるめた背がかかえこむ空間

白い枝が妙に妖しくしんとして静かだ

レンズを覗く眼は

木に寄り添って立つ女を見た

土の境をくぐったはずの

無数の花びらのようなものを従え

透き通る絹をまとい

薄い肩に灰色の翳^{かげ}を宿して

全く動くことがない

それは

癒やされない心を捨てるため

花と果への道行きをえらんだ女だから

優しい花の掌に手を重ねた日

うす紅色に染まった心臓は瞬時に消え失せ

すべては終っている

黙々とシャッターを切る

わずかにカメラアングルを変えたとき
落ちかかる陽の目つぶしに
男はドキリとして我にかえった
レンズに女はもう再び現れてはこない
写した写真のどこにも
めくるめく姿は いないだろう

しだれ桜の幹に
人の背丈ほどのところまでからんだ蔦が
紅葉している

そのあたり 探る眼の底に風が流れ
人形ひとがたの空気が動いたようだ

琵琶湖の十一面観音

石道の観音さまは畦道に咲く野の花のようだ

「炎天下こんなに歩くなんて思わなかった
つきあいきれんよ」

女の荷物持ちをしている若い男がつぶやく

山間の村に観音さまをたずね

家畜小屋や納屋 ぐずれた裏壁にそって歩く

肩中ほどの狭い道が山の中腹にあるお堂への近道

村の人の

「すぐそこですよ」は驚くほど遠い

石ころを埋めた険しい石段もある

世話人が鉤をあけ扉を開く音

素朴な像が正面に現れ息をのむ

今すれちがった村娘がなりかわったようなお姿

賽銭の小銭を出すことも忘れた

歩き疲れて力のぬけた足腰と流れる汗で

ぶざまになった身体を厨子の前に放り出した

わあ！ ああ！ と奇声を響かせ

どこに着地したらよいのかわからない

ひどく不器用な鳥になっている

やっと会えて嬉ぶわたしを

大らかに受容する観音は

下ぶくれの顔 伏せた切れ長の目

紅をひいた厚めのおちよぼ口

右胸に渦巻く木目が稚い乳房を思わせる

長い腕はどこまでも伸びて来て祈る人を抱きとってしまふ

愛らしく親指をあげている右足は

今にも踏み出しそうだ

ふれたい衝動の十指を胸の前で組み合わせると

かすかに朱色が残る腰衣がゆれたように思えた

観音さまは村人のたった一つの心のささえだった

病いの苦しみ男女の愛憎もめぐと誕生長命を願ひ祈る

救つて下さいと懸命に呼びかけ祈る

その掌に 足にすがって祈る

戦国時代の焼き討ちや大水害の水流からも

かついで安全なところに運び出し

密かに守られて村の中にあつた

向かいの集会所で

村の内儀さんが入れた熱いお茶をのむ

「何も無いなあー。面白くないなあー。

こんな処に来るのはおばさんばかりだろう」

「いま乙女のような観音さまに逢つたでしょう」

連れの女に叱られて

つぶやき男は首をすくめ

「うまい」とお茶をほめた

お堂を囲む林からの木洩れ陽なのか

椀底にキラリと光り揺れている象

海辺の情景

目覚めの空が
あまりに青くひらけてゆくので
にわかに絵の具を背負い
九十九里の海へ車を走らせる
薄れた記憶の中で
ちらちらする魅惑のようなものに導かれ東へ
やがて紺青こんじょうと深緑こくろくの海水が視界を洗い
むせるような房州の海の匂いが流れてきた

魚獲る大きな網が干してある
漁師小屋の脇に腰をおろし
太陽と海を描く
どこから現れたか 深海から浮きあがった海人うみんちゆうか
面妖な老人がのぞきこみ
「青木繁という画家を知ってるかね ここは
魚をかつぐ男達を描いた有名な浜だよ」
この会話が引き金になって
あの夏の衝撃の光景が波間をかすめた

数十人の半裸の男女が
地引き網を砂浜に引きあげている
中でも荒あらしい声で音頭をとっている
ひととき遅しい青年
潮焼けした赤銅色の肉体

おしげもなく晒した全裸は濡れていて

脚に海水が滴したたっている

魔羅まらの先まに白幣しろのこよりを結び網をたぐる

着ているもの一切をかなぐり捨て踏ん張る腰と足

朝陽に輝きゆらぐ映像

散歩の娘は

眼を見開き声をのみ

瞬時しんじにして陶醉しびれた

ただ一枚の夏の画布キャンパス 永久に停めてしまったあの朝

天才画家が描いた「海の幸」裸の群像と重なって

過ぎ去った時間が還って来た

私の体内の砂浜に聴こえるのは

青年漁夫にだいた秘かな想いを打ちよせる波の音

*1 魔羅まら|| 男性器・古代信仰の名残り

*2 白幣しろ|| 神にいのるためささげる布や紙

夏の終り

雨の拳こぶしが硝子窓をたたく
ベランダの白いテーブルをたたく
ロツクのリズムで
嵐の夏が叫んでいる
樹木の枝がしない絡み
乱舞した熱情はエネルギーを飛散させ
短い季節を終らせる

古いロツジの部屋はもう寒い

二十年前と同じ豪雨の日
男と女はストープをはさみ珈琲を飲む
蜜とクリームを入れ 纏れた歳月も入れて
飲み干してみても溶けようもなく
舌に残る苦味とざらつき

もう修復の方法がない
歪みとヒビの入った天井から水滴が落ちてくる
髪を濡らした
頬を濡らした
互いに胸底の雨の密度を計っている
もうすぐ床上浸水

壁に雨水が描いた蜘蛛の巣模様
そこにピタリと張りついている二つの生きもの

開いた扉からの突風に乗って飛んだ
お尻につけたままの傷ついた糸
樹間を縫う二すじの行く方

ロッジの中庭に

白いハンモックが揺れていて

ずぶ濡れの女が腰かけている

あれは 次にくる紅葉の季節

こんどこそ

心も体も上手に燃焼させたいと

残してきたもう一人の 私

おちた蝶

村人が噂する

この川の一番深い逢が魔淵に
ピンク色のピアスだけつけた

女の全裸死体が浮かんだ

切り立つ断崖からの身投げか 身元不明
地方版の片隅にのった数行の記事

黒い山が動いていて

どこまでも電車と共に走って来る

今日中に帰らなければならぬ旅の終日

無人駅で終電車に乗る

だれもいないと思つた車内に

男が一人長ながと腹這いで横たわっているのを見た
泥酔し寝ている

汗と酒くさい息が車内を膨張させ

あたりに重く澱む空気が

電車の速度をおそくしている

作業服らしいすそ幅の広いズボン

縄のように腰に巻きつけた上衣

上半身裸の背中に眼は釘付けになつた

浅黒い皮膚に光る糸を放射状に張りめぐらし

細い糸を横に織りあげた蜘蛛の巣

中央には黄色と黒の縞模様の女郎蜘蛛の刺青

男の荒い呼吸で肩が揺れ巢がゆれ
風が流れて妖しい足かせになり動けない

茂る樹木を従えた線路のカーブで
男が寝返りし胸が露あつちやになった
背中から続く網の罫にかかり
ピンク色の下翅したばを広げた蝶が
磔むちになっている

闇の底のほうから湧いてくるような
奇妙な唸り声 忌まわしい言葉の連続
男は胸の蝶を掻きむしる

何かが車窓のガラスに突きあたる音
男の胸から剥れてまつすく飛んできた蝶の
凄絶な体あたり

傷ついた翅の鱗粉を散らしながら
広以外の明かりを慕う翅音が
次第に重音の波動となつて神経を砕く

次の駅近くに昔油絵に描いた大きな橋がかかっている
川につき出た崖の下には底のみえない淵
スーッと乗降ドアが開き蝶が飛び出た
男の胸と光の間を歩き戻りしていた飛翔を
瞬間見失う

ホームの先端漆黒の闇の中を
時をこえてゆらゆらと遠ざかつてゆく女の後姿があつた
都会に近づくとつれ乗客は増え
気づかぬうちに消えていた怪しの男
ひどい臭気だけを残して

気怠い夢の中の出来事かとも思い
熱暑の幻覚だと云われもしたが

一日中心が揺れつづけた翌朝の三面記事から

あの怖しい淵に力つき落ちてゆく
蝶の姿が見えてくる

高野山奥の院

杉木立の中の秘められた墓所に
建ち並ぶ四十万基
権力者達の巨大な室や塔も
無縁仏の小さな石も仲よく苔むし
千年の時をかけ 受容した死も溶け
記録も消して 円くうづくまる

封じこめた死者と現とのどんな繋がりなのか
長い歲月墓の思いを鎮めようと

力づくよく石を抱え噛みつぶけてきた苔
祈りの胞子はひろがりつつ光る

雫を含んで緑の魅惑を放っているものの上に
掌をおく 震える心をのせて呼吸する
みえない微小粒子が
静かに指先からしみこんでくる
満ちてくる波のように
ひたひたと襲ってくる
しだいに喫水線を上げあふれそうになり
もとの私は押し出された

不意に全身が微笑んで
透き通る液体になった
ひかる地衣類の上に私は水になって落下した

日常の暮らしから抜け出そうと遠出をし

新鮮で強い気を浴びにきたのです

ほんの少し仏の世界をのぞき触れただけなのに

動揺の空間に私があった

苔の上の水一粒になつて

死者の尊厳をおかし

霊域の眠りをさますもの

にわか巡礼者はゆつくりと転生し

苔は美しく増殖する

深大寺十三夜祭

末裔の遠い血が呼ぶのか
かきたてるのか
秋雨のようにこの身と心をぬらす
平家琵琶の音

深大寺門前のステージで男が
耳なし芳一を語り弾いている
寺を巡ってきた枯葉色の風のような響きに
瞑目したまま身をまかせていると

撥が網膜を剥がし
遠い記憶の地の果てに引き込まれてゆく

古人がゆきかっている
ゆらゆらと
芳一は琵琶を弾く
月をかくし樹木をゆらす雨をつきぬける
冥界との通信
死者の魂をしずめる糸のふるえ
地底から甲冑の音を鳴らしながら現れた武者達
刀は振りおろされた
墓場の亡霊に耳をとられた芳一
経文をからだ中に書き埋めたはずが
耳だけ忘れた

琵琶の音が聞こえる

門前の奏者

あれは芳一

狂気を闇にかくし琵琶を打ち鳴らし
雨の海綿質の闇を叩きつづけている

晩秋の沼

沼は人を呼ぶ

旱のときひでり 女を呼び込むと

村里の人々は囁く

知人の家がある深山の狭間に

その沼がみえた

星々のふりそそぐ獣道

いちめんの紅葉をふみわけて水辺におりた

異界からやってきた風なのか

冷気が体温をうばってゆく

水面は月光の透視をこぼみ

森を溶かし

いきものの命を溶かし

苔色にとろりと静まりかえっている

沼底には主である竜神が

棲んでいるにちがいない

紫、緑、銀色の鱗につつまれた蛇体の化身が

貴公子の姿で凜然と座っているのを想えば

ほんの少しもの狂いとなり

山の実の酒を飲み交わしたいと

その沼を怖れながら

どこまでも吸い寄せられてゆく

水底につながる石段でもあるのか
大蛙 かわうそ なまず 鯉まで現れ
黒い水面を盛り上げ
這いあがってくるもの達
だが
竜神は姿をみせない

立ち入り禁止を破り
水藻をひきずり淵を徘徊し
沼の沈黙を破ったのがいけなかったのだ
沼の生贄になってもいい
どんな崇りがあるうと
人里への未練をすてて
この森を出ない と

水辺に佇む

闇の底から聞こえてくる
かすかに かすかに
竜神の鱗がすれる音

旅

流れる川面を
抱き締めてもらえるかと
覗き込みながら

細い枝先で
穴のあいてしまった葉っぱを
燃えたたせているものは なに
たずねないで

散るって つらぬくこと
小さな流れに ゆっくりと
朽ちるまで運ばれて

古都はどこまでも紅葉あかく美しい

桑の木

次つぎと建つ家に囲まれ

額縁にはめこまれたような野菜畑

狭まってゆく土地の門かどとなった一本の桑の木

枝をことごとく切り払われ

でくの棒のような姿

太い幹にはぼっかり穴があき

枝の先はごつごつとした瘤こぶになっている

その老木の前に立ち毎朝祈る農夫

「この木は私たちの神さまなのさ」

黙々と春めく土に鋤を入れる

一面桑畑だった

幼虫には新芽を摘み与え

艶やかな葉をつけた枝は成虫のものと

たえまなく切りとられ棚につまれた緑を

水の流れるような音をたてて喰む蚕

「蚕が透きとおる白い糸を出すまで桑を与え春子、夏子、冬子、

と云って三回も子どもを育てたのさ

この木が育てたお蚕かいこさんが家の生計を潤したのさ」

木の根元にあぐらをかいて煙草をふかす農夫

高い梢を持ってず

紫の実をつけることもなく

枝の切り口に瘡かさを盛り上げ瘤かさになった木

三百年の歳月が過ぎ

無骨な姿で島の真中にぼんやりと立っている

太陽が沈みながら

やさしい光線で瘤をなでる

青い夕暮れから刻々と色を変える木はやがて

豊かな乳房と腰の女神のシルエットになった

感受の耳は遠くに

農夫の祈りの声を聞いた

Ⅲ章 彼岸花

彼岸花

七里ヶ岩といわれる崖上一面に咲くのは彼岸花
秋をよび寄せる霧雨にぼわつとにじんでのいる
天空に映っているように見える
これから行くこうとしている寺が浮かぶ赤い花野
嘆きながらその寺に行くのだ
柩の中で弟が待っているから
さまようように濡れ花にふれながら
ズック靴を重くして歩いた
川におちたことを 死を考えたくないの

穴のあいた心で行きつ 戻りつの道草をした
弟の亡骸には逢えなかった
もう珊瑚のかけらみたいな骨になって
小さな壺の中はいつていた
四歳で旅立った弟は空よりも遙かな奥の空
花野の向こうで
可愛い手をふっている

逢わなくては 謝らなければ
おまえの傍についていなかったことを
私は無意識の中走り出していた
母の声を背中で聞いた
「駆けてはだめ お寺のなかで怪我をすると
一生傷がなおらないよ」
崖はどこまで続くのだろう

走っただけ果ては遠のいて

後には折れた花首の赤い道ができている

そう思ったとたん前のめりにころんだ

胸を打ち痣をつくった

崖がつきた下には弟が溺れた川が流れているはず

母の背中

湯あがりの母をみつめていた
裏庭に面した縁側に座り
浴衣を腰に巻いた裸の後姿
蚊やりの煙をあびながら
なだらかな放物線を描く背中

盆の縹色はなだいじょうの闇の中で
裸の背中を美しくしているものは何だろうか
ふつふつと湧き出す汗の光の下のか細い背骨

「おとうさんが　そこに」
静かな声がある
ぱたぱたと団扇を使う音のくり返しに
遠い記憶となりつつある死者との会話
二人の息子達は四歳で先立ち夫も遙かな空に
戦争があり　空襲の廃墟にうづくまる
苦しい生活くらしもあつた
小さくやわらかな砂丘に似たかたちの母の背中
悲しみに耐えるたびに
少しずつ円くなつていった
ときには世間の風かぜにもたち向かつた強さで
住み慣れた家に一人で暮らすと言いはる
晩年に近づいた背中が
前のめりに夢遊のような揺れ方をしている
嘆くこともせずほそぼそと生命いのちの水を滲ませて

白い砂丘にしろされた流れのあと
隠しようもない孤独な性^{さが}

その背中をいたわろうとすると
片意地張り拒む 中身ごと抱きささえるには
風紋の下にひっそりと在る思念の水を
ひどく不器用だが
砂層深くもぐり込んでゆきたずねあて
両掌で受けとらねばならない

白^{りんず}綸子の小袖(一)

袖のまるみはどう縫うのか小学生の時の宿題だった。衿付けは浴衣の習作でおぼえたはずが、不器用な私の心に一針の記憶も残らず、着物の仕立て方の本を左手に、綸子の白生地を広げたまま思案している。

彼岸への旅立ちの日に着る衣裳を、縫えないのは不作法です。母の声が聴こえてくる。その時が来たならば身支度は自分で縫った白綸子の小袖を着るのが母から娘へと代々伝えられてきた女の作法。

そういえば八ヶ岳おろしが吹きつづく一夜一夜の闇をかさねながら母は小袖を縫っていた。仕立て上がった朝廊下のガラスをぬけ障子をぬけた太陽が座敷の衣桁^{いごう}に掛けられた着物の地模様を浮きあがらせ光るのを、うっとり眺めていたのだった。

白綸子の小袖(二)

「お前には近くに住んでほしい。お迎えの時が来たらすぐに跳んで来て白綸子の小袖を着せておくれ。」母は願ひ甲斐駒ヶ岳が裾まで雪化粧した朝誰もいない部屋で旅立った。

間にあわなかつた。紺の小紋を着た胸の上に重ねた手は浮いていて何か包みを抱いているように見える。微笑して話しかけたような顔のまま目を閉じていた。ごめんなさいあの小袖を着ましよう。だが何処にも見当たらない。

そうでした一枚目は娘の嫁入衣裳に加えられ、二枚目は孫の七五三の晴着になり、三枚目を用意する時には老いてしまっていた母。そ

れでも簞笥の下段に小袖が入れてあるからといい続けて。

安心して、納棺人が旅立ちの支度をします。布地かと思える白い和紙を着物を仕立てるように切り、折りたたみ身体に重ねてゆく。胸元は端正に衿を重ね合わせ、下半身にも乱れなく紙布を巻きつけ、帯も袖も、最後に綿帽子をかぶせ、純白の振袖姿が出来あがりました。もうすぐ先で待つている父のもとに嫁入りです。自分で縫った小袖の入った見えない包みをしっかり胸に抱いていた手もほどけて。

野馬が駈ける

雨が降り続き

育った夏が

庭の空間を埋めるのにいそがしい

湿気に浸食された納戸で

引き出しをきませ

ハラリと落ちた絵ハガキ

父が墨で描いた馬の絵

父のあぐらの中で

幼いわたしがせがんだ馬の絵

夏休みの宿題にも

父のみごとな毛筆の曲線が加わり

二人の秘密となった

ひとりだちした娘への

季節ごとの便りにも

望郷と愛をこめた馬の姿がえがかれていた

思い出は

野馬を走らせる

亡き父のふる里

相馬高原の地平が

青くせりあがってくる

空へ駈けあがろうと前足を高くあげ

たてがみを太陽にいとませ

風をひきつれた尾は長くなみうつ

いくどとなく話に聞いた相馬

父の魂の土を

蹴ちらして野馬が走る

裸馬に亡き父が乗っている

何時までも軟弱なわたしは

かならず相乗りしすぎるように

父の背を抱きしめている

いななきが蹄ひづめの音が耳の奥で響きはじめると

プラズマジン*がどうしようもなく

馬上の父を追いかける

*プラズマジン||細胞質に存在する遺伝子

ふる敷

福島訛りのぬけない父の影響を受けて育ち
大人になっても風呂敷をふる敷と言って
友達に笑われた

——いつもの引き出しからふる敷を出してきてお酒を二本包んでおくれ

大風呂敷を広げ瓶の底を
向かいあわせに横にしてくるくる巻く
二本を立ちあげて布の端を

瓶の首にS字に交差させ縛り
持ち運べるようにする
上手に包めて父にほめられることが嬉しかった

——遠足のおむすびを緑色のふる敷に包んでおいたからリュックに入れなさい
七輪に網をのせて焼いた一口大の握り飯
砂糖と醤油のタレをぬり 海苔でくるむ
料理が苦手の母に代わり父が作ったお弁当が匂っている
大きく息を吸い込みいつも包みの上にキユツと
鼻をおしあてた

——書類の入ったちりめんのふる敷包みを机の上から持ってきてくれないか
母でもなく他の誰でもなく

私が頼まれたことで得意になった
玄関で手荷物を渡す役目をやりたいと
前々からかわしていた二人だけの密約
わざと忘れた包を受けとり脇にかかえ出かけてゆく父
その前を風呂敷のマントをひるがえして
弟が横切る 正義の味方のお通りだ と

茶箱をあけた 虫干のために
縞模様の風呂敷包みが出てきて
先端に父のフルネームが縫いこまれている
結び目を解くとさくら色の振袖が現れ
ずいぶん昔の少女の頃がするする甦ってくる
干竿にかけた布たち
日射しのきらめきを空中で包んだり 広げたり
手品のような不思議な現れかたで

その縁から覗く^{のぞ}亡き父の顔とわたしの少女

父が残していった形見の風呂敷
もうひとつあった 訛りの言葉 ふる敷

ヒユルヒユルと咽を通る

いつも田植と稲刈りの時期に頼んでいる
郡内の男しが手伝いにやつて来た
二百十日頃の嵐の被害もなく収穫の日が来た
鎌で刈った稲束が重い
二等分にした束を稲架にかける
今年に雇い主が兵隊にとられ人手が少なく
朝から休まず働く男しの体に
吹いてくる盆地の風は暑く重たい
いつもより数日多くかかって仕事は終わった

山間の村に帰る男しの為に脱穀した米を炊く

「漬物と味噌汁ばっかだけんど喰って帰れし」
「ほうですけ おごっさんです」

黒びかりする床の上の膳に手をあわせてから
一粒一粒の米粒をゆつくりのみこむ

「いい匂えだ 飯が口の中でつるつるして
ヒユルヒユル と咽を通ってゆく
うまいもんだなあ 米の飯は」

男しの村では米は穫れず唐もろこしが主食だ
石臼で実をすりつぶした黄色く荒い粉を練り

平らにのばし焼いて食べる
ザラザラとした舌ざわりにくらべ
飯の味わいは特別だった

「草臥れとうから一寸と休んでいけし」

「ふんだって早く帰っておらん家のもんにも
新米くわせてえので 又来年も

こけえくるからよろしくおねげえしいす」

給金を懐に米袋を背負子にくくり飛んでゆく

飛べ、飛べ、自転車

訪ねて来た夫の妹が いきなり言った

「姉さんだ、ちもねえじゃん」

玄關脇にあるボロ自転車をみて

「ゴミのようなこんなもん使っているのけ、みつともねえじゃん

新しいのを買やあいいじゃん、いま停留所の前のスーパーで、マ

マチャリに赤札ついているのをめつけたから飛んで、つて買って来てやるじゃんけ」

赤青緑 色あざやかな縞模様の小柄な車体

物置にあつた残りペンキを塗った

レインボー車を私は気に入っている

サドルの皮カバーは鉸びょうがとれ剥げかけている

車輪やチェーンにも錆が進んでいて

ギイコガチャンギイコガチャンと音をたてる

買物の途中でチェーンがはずれれば

棒切れで苦勞して直し又走る

錠もライトも役立たない

ブレーキがキイキイキーと叫べば

学校帰りの子供達は皆よけてくれる

笛の音が聞こえてきそうな空に月ができた

庭で歯車に油をさし錆落しでみがき

ゆずられた籠を付けないおして、仕上げに

前輪にまたがってエイッ！ とハンドルを直す

夜道を走ってみる 月に向かつて走る

長年つきあつた愛しいファッションサイクル

まだまだ粗大ゴミではありません

「姉さんけちなこといっちふいね どこから見てもぼぼちい自転車
じゃん」

妹の声だ

* 「」印は甲州弁

居場所

トンネルの向こうに見える今日の風景は
林や田畑に囲まれた茅ぶきの農家
私がそちらまで行くのは時間がかかる

義父はもうそこに居た

半身不随の身体を仏間の布団に横たえて
先立った妻の名を呼んでいる

「鶏小屋に行つて産みたての卵をとつてきておくれ 卵かけご飯を

たべたいから」

などと言っている

私もそちらに行つて義父の半身を助け起こし

卵かけご飯を手渡す

食後のお茶を飲みながら

小半日義父の話し相手になる

「野菜の出来が良かったね 毎日出荷でいそがしかった 今日はず
後から映画を観に行こう 阪東妻三郎をみたいね この前観た上
原謙と田中絹代はよかった」

記憶の場面が浮び出てくるのか
急に大きく目をひらき生き生きとしてくる

すぐに着替えて出かけようと言い出す
つられて一緒に映画を観たように思えてきて無邪気に返事をしたが
ちよっと待って

ずいぶん昔の知らない話だし

ここは病院の一室なのだ

私はそろそろトンネルを戻らねばならない

「おとうさん映画はこんどにしましょう

昼寝の時間ですよ」

優しい表情になって眠るのを見届け病院を出る

橋を渡り電車に乗り我が家まで遠い道程なのだから

明日トンネルの先に在るのはどこだろう

その日によって違う義父の居る場所

彼方の青

松林を背に義父と鹿兒島の
小さな砂丘に座つて海を眺めている

「松の木の様子が違うけれど

ここは何年か前に来たことのある

三保の松原だよ

砂浜に並んで見た空と海はきれいだったなあ——」

私を連れ合ひと思つてか話しかけてきた

同じ場所と時間に乗りうつれないまま返事をつぶやく

「今日も楽しい旅行になると良いけれど」
掬つた砂を足元に落しながら

「隣に居るのになんだか遠くの波間から声が聞こえてくるようだ」
不思議そうにのぞきこんだ顔に

「あの深い青色の向こう側から波に乗って声がとどいたのよ」と答
えたのは

「水平線の彼方にある美しい島をさがして行きなさいと死者に言つ
て手をあわせる」

奄美大島の村人の言葉が聞こえたから

義母はもう美しい島に行つてゐる

そう信じられる紺碧の海のまばゆさ

みつめながら義父との束の間が流れた

波打ち際を楽しげに戯れながら走り廻つてゐるのは

少年とその父親

私は急に淋しさを感じて二人に手を振る

「旅行にゆこう！ 夏休みの作文に書くんだ」

子の頼みにワゴン車の後部に布団を積みこみ

自由を奪われた身体の義父を寝かせて家族四人旅に出た

長い海岸線を車で走り砂丘についた

少年は無邪気に小波とたわむれ沖をみない

私は彼方に返ってゆく波のように

青に溶けこみたいと憧れをもち怖れもしながら

砂の上で膝をかかえている

義父が杖を片手に立ちあがった

心を騒がせているものは何であるのか

遠い表情で水に向かって足を踏み出す

私はあわてて腰に手を廻して支えた

冥界からきた蛙

溜め息の車がつながる

渋滞の高速道路を走り

西日に挑いどまれて不機嫌な玄関に帰りつく

樋ひにからんだ夕顔の下で蟻蛙ひきがえるがわたしをみている

お盆の墓参りで石塔の影にいた蛙ではないか

木喰もくじき仏ぶつふうの顔が薄目を開けたり閉じたり

義父ちちそっくりの微笑で

咽をふくらませ何か言っているようだ

蛙語で「私だよ」と呼びかけている

死んだ義父が蛙になって会いにきたのか
いや逢魔が時がもたらした幻想かもしれない

脑梗塞で寝たきりになった義父

看病のなかばで急逝した義母ははからバトンタッチしたわたしを
ずうつと連れあいと思いきんだまま逝った

「川を渡り木から木へ滑空しながらこの家まで逢いに来たのさ

行こうよ、いっしょに跳ねようよ」

近くから盆踊りの歌声が聞こえてくる

誘うように目玉をくると動かし

蛙はゆつくりと花の下にある穴に入っていた

太鼓の響くなかわたしはじつとその前に佇んでいる

すっかり日が昏れると鼓音は急に大きくなり

わたしは暗い穴の中に吸い込まれた
トンネルの先は奥深いひろがりがあつて
提灯が薄くにじみ踊る広場のようだ

この世では逢えなくなつた人が見える 踊っている
顔の前で手をたたき繰り返し掌を差し出して

わたしをまねく あの人この人の白い手が

輪のなかに飛び込んで歌いながら足を跳ね広場を廻るわたし

穴がすでに異界だつたのだ

足と足の間をよぎつてゆく影は

蛙ではなく義父の魂なのかも

月がいつてしまふと祈りと祭りの場は消えた

川を渡る人のため門前で送り火を焚く

あとがき

ふと空を見上げたくなる。雲に、風に触れ時には月や星にも、水、木、花にも我を忘れ溶け込もうとする。心身のすべてを解放して魅惑の相手を感じようとしませんが、魂と身体はいつもズレていて孤独な我がポツンと佇っているのです。それでも余裕があり優しくなっている時は心にうつしとった「象」の音が聞こえてきて新しい出会いを経験することが出来ます。体の奥に意識していなかった何かが湧きあがりそれを掬いとろうと夢中になります。隠れていた自己を確かめるように。

驚いたり、怖れたり、小さな発見があったりして弱い人間である私を見知らぬ心のふる里へとみちびいてくれます。

弟を奪った水もそのひとつでしょう。その流れを怖れながら棹をさし誘われて川岸の花を愛で今日までやってまいりました。

詩をおし出会えました方々に感謝致します。

二〇一〇年十月

安永圭子

安永圭子（やすなが けいこ）略歴

一九三五年 埼玉県で生まれ、山梨県甲府市で育った。
一九九九年 第一詩集『いのちいつぱい咲くからに』（飛天詩社刊）
二〇〇六年 第二詩集『七月六日の赤い空』（土曜美術社出版販売刊）
二〇一〇年 第三詩集『音を聴く皮膚』（コールサック社刊）

所属 日本現代詩人会、詩人会議、山梨詩人の会
詩誌 「櫟」「コールサック」（石炭袋）に寄稿。

現住所 郵便番号 183-0035

東京都府中市四谷3-55-91 渡辺方



石炭袋

安永圭子詩集『音を聴く皮膚』

2010年10月18日初版発行

著者 安永圭子

発行者 鈴木比佐雄

発行所 株式会社 コールサック社

〒173-0004 東京都板橋区板橋2-63-4-509

企画・編集室 209

電話 03-5944-3258 FAX 03-5944-3238

suzuki@coal-sack.com <http://www.coal-sack.com>

郵便振替 00180-4-741802

印刷管理 (株)コールサック社 製作部

*表紙画 安永圭子

*装幀 亜久津歩

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

ISBN978-4-903393-96-4 C1092 ￥2000E

安永圭子詩集『音を聴く皮膚』栞解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2010

阿修羅の川音を共感覚で捉える人

安永圭子第三詩集『音を聴く皮膚』に寄せて

鈴木比佐雄

1

安永圭子さんは、身近な自然や事物を直視しているが、いつのまにか次元が異なる幻想領域というか、霊的な存在に促された詩を書き残してしまふ詩人だ。そのことは第一詩集『いのちいつぱいに咲くからに』を読んでいて気付かされた。しかしこの一九九九年に刊行された第一詩集は、発行が詩誌「飛天」であったこともあり、発行部数も少なく、多くの人の眼に触れられることはなかったらしい。私も読む機会がなかったが、今回初めてその詩集を読んでみて、宮沢賢治とも似た尋常ではない幻想力が溢れてくるのを感じた。詩「紅葉の中の爪」が安永さんの詩の魅力をよく表わしているのを引用してみる。

紅葉の中の爪

爪にやすりをかける
細く鋭く

ゆっくりとマニキュア液をぬる
妖気をさそう赤色
呪いのようにフーと息を吹きかける
出来ばえを眺めれば浮き浮きして
握ったり開いたり
指がなにかをつかみたがっている

猫が鼠を捕まえてみせに来た
排水口から現れるのを
待ちかまえていて爪でおさえこんだのだ
啜くえて来て目の前にポトリと落す
ぐったりしている鼠を

ひっくり返したり爪をたてたり
さんざん遊んでゆっくりと喰べたあと
たんねんに爪のそうじをしている

女は妖艶に笑い

流れの傍の岩屋に誘った

旅の男はすぐについて来た

川を渡る手助けをたのむと

背中をかしてくれた

腕をまわしてしがみつく

すかさずその胸に短刀をつき刺し

懐から抜き取った財布をにぎりしめる

血に染まった赤い爪

冬が来る前に村へおりよう

最後の獲物と思つた男に

みやぶられ逆に刺し殺された

鮮血をまき散らしたような紅葉の中

流れにそって歩くど飲くびに血が騒ぐ

赤いマニキュアの指先で

陽気な男たちを誘つては濡れてきたが
思いがけない殺意の淵がまつていて

男のナイフに刺しつらぬかれようとは
無意識な爪あとを彼の背中に残し
流れに沈む

倒木の枝先に一枚の紅葉がゆれている
阿修羅の川音にささやかれながら

この詩は、誰かが赤いマニキュア液を爪にぬっている時に発想したのかも知れない。または紅葉が川を流れていくのを見た時だったかも知れない。赤いマニキュアの爪から猫が鼠をいたぶりながら平らげてしまう様や、紅葉の川流れから娼婦の死体が流れていく様に、場面を転換していく安永さんの想像力は、不思議な魅力を放っている。生きていくものが他の存在を殺して生き永らえている赤裸々な原型を浮き彫りにしている。安永さんは傍らの自然や存在物の奥底に潜む生の衝動のようなもの大らかに提示しているだけなのだろう。それゆえ自らの詩に書きたいことを書くというシンプルさが、詩行に自然なリズムを生み出し、リ

アリゾムの視線がいつのまにか異次元の幻想空間になつているにもかかわらず、その転換に気付かずに読まされていることになるのだろう。安永さんは詩を書く前には、昔から絵を描いていたそうだ。その絵について第一詩集の跋文の解説を書いた磯村英樹さんは次のように紹介している。安永圭子の「絵は写実的ではない。日常の表層の奥の意識の深層から掬いとってきたイメージを華麗な色と形で表現する」と記している。磯村さんは安永さんの絵を人間の深層をイメージ化していると評価している。そしてそのような精神性が詩においても生かされていて「人間の始源的な感覚を大切なものにおもひ」、「花には花霊を、樹には樹霊を感じとつて詩を書こうとしている」と安永さんの特長を的確に指摘している。安永さんは詩誌「飛天」で敬愛する師である磯村さんや詩友の田上悦子さんに励まされながら詩作を続けてきたのだろう。その成果がこの完成度の高い第一詩集だったのだ。

雑木林の落ち葉はけものの匂い

桜並木の落ち葉は甘い匂いがする

犬が顔を背中をこすりつけころげまわっている

「花の下にてわれ死なん」とうたったのは西行

だった

桜の根元でごろりと横になり死んだふりをして

みる

わたしは土にかえる時どんな匂いを出すのだろう

う

このまま埋もれてしまいたい

木の葉がかけ寄り耳もとで

「人間臭い」と笑う

わたしは突然掘り出され陽に曝されたミミズの

ように

身をくねらす

落葉の匂いで犬が狂う

ときには人も狂う

安永さんは「阿修羅の川音」に耳を澄ませているのだが、決して人間の苦悩を前面に出して悲愴にならないで、生きることや存在することへの感謝が感じられる。それは人間の存在をもっと広い森羅万象の観点からや、例えば宮沢賢治の「宇宙意志」にも近い視線から見詰めているように思われる。そんな人間の限界を突き抜けて、人間の究極の姿を垣間見ている詩「いい匂いをする骨」を引用してみる。

いい匂いをする骨

厚く散り敷いた落ち葉の上を歩く

足の裏に秋の深まりをたしかめ

かかどが埋まるままで踏み鳴らす

無へ向うはさまの静かさを破りけちらして

スキップする

朽葉がめくれ

微生物や小動物の死骸が見える

秋が染めあげた綾織物の下で

肉は土に溶け 白く残された

いい匂いをする骨になりたい

私たちは落葉の上を散歩すると、何か静謐な安らぎの思いがわきあがってくる瞬間がある。その晩秋はこの世の生あるものの儂さを感じる時なのだろう。安永さんは落葉に寝転びながらそのような思いに捉われる。さらにそこで木の葉がしゃべり出し「人間臭い」というささやきを聞いてしまうのだ。この木の葉との対話を自然に幻視してしまうことが安永さんに詩的精神の表われであることは確かなことだ。幻視したことから促される詩作は、本来的な詩人には欠かせないことで、安永さんはそのような詩神（ミューズ）から呼ばれる詩人だと思われる。

2

第二詩集『七月六日の赤い空』は二〇〇六年に

刊行された。この詩集は、安永さんの感受性を前面に出している第一詩集とは異なり、甲府空襲の体験を中心にしたりアリズムの詩集だった。私にも送られてきてすぐに読んだ記憶がある。その頃に『原爆詩一八一人集』を翌年に出すために、私は原爆詩を書いている詩人の詩篇を集めていた。安永さんの第二詩集だけを読んだ人たちは、安永さんをきくとリアリズムの戦争と平和を考えている詩人だと理解しただろう。私も安永さんをおのように理解していた一人だった。私は『原爆詩一八一人集』に第二詩集の詩「忘れてはいけない」で参加してほしいと連絡をとり、収録してもらえなかった。その詩「忘れてはいけない」を引用してみる。

忘れてはいけない

滅茶苦茶ノ爛レタ顔ノ
ムクンダ唇カラ洩レテ来タ声ハ

「助ケテ下サイ」
静カナ言葉 コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス
(広島原爆記念館揭示パネル・
原民喜『夏の花』より)

あの日から五十年以上の年月が過ぎた
広島原爆記念館でその詩を
思わず声を出した読みあげた瞬間
小さなパネルの中から
血濡れた手がぬつと突き出て来た
うめき声も聞こえて来る

忘れたい
思い出したくない
日常は時の地底に鎮まっついて
起きあがってくることはないのに
悪夢のような光景がまざまざと呼び醒まされた
鉄の雨で破壊され火にあぶられた
恐ろしい顔 火中からの断末魔の悲鳴

十歳だった
郷里甲府で

空襲の真つ只中を線路つたいに逃げた
棒切れのような黒いかたまりに躓く
老婆が焼け爛れた顔をあげ
どろどろの手をのぼして
モンペの足首をつかんだ
「助けて！ 水を 水を！」
その手を声を
払い捨て父の後を追って走った

昭和二十年七月六日
B 29爆撃機一三九機甲府盆地空襲
投下焼夷弾九七〇トン
焼き殺された非戦闘市民一、二七人

安永さんは自らの幻想力を封印しながら、十歳歳の時の甲府空襲で体験した事実を二十三篇の

詩で記録しようと試みた。安永さんから以前になぜこの『七月六日の赤い空』を書こうと思ったのかをお聞きしたことがある。その時に安永さんが語ったことは、ドイツのヴァイツェッカー元大統領の終戦四十周年記念にした演説を読み、そこで語られた「過去に目を閉ざすものは現在にも盲目となる」という言葉から、歴史の悲劇と戦争責任を忘却してはいけないという強い思いを自分も再認識したという。その時に甲府空襲について詩で書き残そうと決意したらしい。安永さんのこの詩集は、多くの反響があり、今でも山梨や空襲の記憶を残そうとする関係者たちから講演の依頼が来ているという。亡くなった浜田知章さんは、ヴァイツェッカー大統領が語った後世の者であったという決意を、評論などに書き記している。私も会話の中でもよくその言葉を浜田さんから繰り返し聞いていた。安永さんは甲府空襲で亡くなった一、二七人の命の重さを背負いながら、この詩集を

後世に残そうとした。この安永さんの歴史の根拠を記そうとする試みはとても尊いものだ、と私は考えている。二〇〇七年八月刊行の「コールサック」五十八号は、『原爆詩一八一人集』の書評特集だったが、安永さんに甲府空襲についてエッセイ「十歳の夏の夜は戦場だった」を寄稿して頂いた。そこで甲府空襲で父母と子供四人が逃げ惑い、多くの悲劇を目撃しながら奇跡的に生き延びたが、四歳の弟だけが川で水死してしまうことが記されていた。戦後になってその弟のことをノートに記したのを母が読んでしまい、そのノートは燃やされてしまった苦い思い出も語られていた。その弟のことを記した詩「蛭」を引用してみよう。

蛭

スカートに裾にすがるように蛭がとまっている
気づいて声を放つと

黄色い光が儀式のような曲線を描き
漆黒の闇に消えた
盆も近い夜の迷い蛭

戦時中

空襲で焼けだされた一家が身を寄せた町
家の前に川があった
水辺で捕まえた蛭を
「弟の魂だ」と母はいつて
蚊帳の中にはなした
か細い点滅をじつとみつめていた当時の私
爆弾の雨から
炎の中からやつと生きのびてきたのに
この町の川で溺れ死んだ四歳の命
弟から目をはなしたすきの事故だった

幾たびか夢にも見た

記憶の底を流れる川があり

川の底を流れつづける子どもの

流木のように浮き沈みする幼な顔
下流の鉄柵に芥(わづ)のように引つ掛かっていた弟の
からだ

許されない悲しみ

いつまでも過去とならない死者との対話が
私の内部にどのように関わりあい
どのような時間の意味を持ったのか

養殖蛭の水辺をゆらゆらと歩く

あの時の母をこえた老いの影

金網にかこまれた保護地の中から

ふいに幼い瞳に似た光がながれ

闇よりも深い闇をどこまでか

この詩「蛭」を読むたびに十歳の安永さんが生涯にわたり、甲府空襲と犠牲者一、二七人と同時に弟の死を決して忘れることなく鎮魂し続けてきたことを感ずる。清流に生まれる蛭のように弟も川を流れながら生き続けて再び家族の前に現れ

てほしいという不可能な幻視をこの詩は実現しているのかも知れない。戦争の余波で亡くなった幼児たちの慰霊の思いは永遠に続いていくのだと感じさせてくれる。例えリアリズムの詩であっても、先の詩「忘れてはいけない」の一連目「小さなパネルの中から／血濡れた手がぬつと突き出て来た／うめき声も聞こえて来る」のような被爆者の霊を感じてしまうのだ。その詩行や「蛭」においても、安永さんの感受性は眼に見えない他者の存在に気づいてしまう「心象」を招きよせて現実以上の強固なイメージを形作っている。その意味では一見リアリズム詩のように思われても、実は霊的なものを感じて想像力でリアリティを補強した恐るべき詩篇だといえるだろう。安永さんの詩の魅力は、この第二詩集では隠されていたが、本来の安永さんの感受性を露わにした詩篇は書き継がれていて、今回の新詩集に明るみに出されることになる。

新詩集『音を聴く皮膚』は、三章に分かれ計三十一篇の詩が収録されている。一章「音を聴く皮膚」十篇には、安永さんの個性的な感受性によって現実が様々に変形され、歪まされて、現実が豊かな多次元空間に転換されていくような思いがしてくる。詩「音を聴く皮膚」は安永さんの感受性の特長である音感が触感に転移するなどの「共感覚」を露わに示している。インドのシタール奏者の奏でる音色が火傷した手の甲が反応してしまふ。そこから入り込んだ旋律やリズムがガンジス河の魚たちなり、飛び跳ねていくのだ。耳が聴こえなくとも皮膚が音楽を触るように聴くことが出来ることを描いてしまふのだ。詩「初夏の蛇」では、木を揺すって蛇を落としてしまふ乙女を幻視している。本当に見たことのないシニールリアリズムの世界が紡ぎだされている。詩「木精」では、故郷の山梨の銀杏の大木との対話から成り立っている。詩「さびしい庭」の親子

の白猫、詩「静かな夕べ」のムク鳥と少年の交流などを記し、人間が他の生きものと関わりの中から世界の多次元性を感じているように思われる。二章「海辺の情景」十篇は、旅の詩篇だが、詩「海辺の情景」は画家である安永さんが天才画家の青木繁が描いた「海の幸」の舞台である九十九里浜を訪れてその画家の思いに肉薄していく。また詩「しだれ桜の景」では、しだれ柳を撮影する初老の男が木に寄り添う女を幻視してしまふのだ。安永さんは現実の観光地を見ている他者の心象を垣間見えてしまっている。「琵琶湖の十一面観音」、「高野山奥の院」、「深大寺十三夜祭」などの詩篇で寺院や仏像の前で時空を超えて霊的な存在との想像上の対話も尽きせぬ面白さがある。さらに詩「おちた蝶」では、泥酔して男と二人だけの車輪で恐怖を感じながらも、様々な心象風景が重なり合って独特な詩的世界を形作っていく。これらの詩篇も安永さんの視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚などが重層的に入れ替わっていく「共感覚」の鋭

さが生み出したものなのだろう。

三章「彼岸花」十一篇は、父母、義父母、弟たちへの鎮魂詩だ。そのどの詩も繊細で胸に響き渡る詩篇だ。家族にこれだけの感謝の気持ちを持つに秘めて書かれた鎮魂詩は多くはない。安永さんは義父など長年にわたり自宅介護をされていたと聞いている。その閉ざされた日の当たらない家事をこなし、運命的な関わりに感謝を込めてこれらの詩篇を書き上げたのは、きっと多くの介護をされている人びとにも共感されるに違いない。詩集タイトル詩「音を聴く皮膚」を引用してこの小論を終えたい。またカバー挿画は、タイトル詩の「水平線上に沈む陽に染まったタートルの魚たち」を安永さんがイメージ化したものだ。詩的な感受性を多様な観点から押し広げようとしている人びとにぜひ読んで欲しいと願っている。

音を聴く皮膚

火傷がなおったばかりの手の甲が
 いつの間にか真赤になりけいれんしている
 皮膚は覚えていた容赦なく襲った熱を
 シタール奏者は激しく弦を爪弾きつづけた
 ラビシャンカールの夕陽のラーガ^{ラガ}を
 会場はくりかえし打ち寄せる波のタートル^{タートル}に熱い
 海となった
 聞き入るわたしは沈む光の飛沫^{しぶき}に
 全身をぬらし海底に引き込まれてゆく
 ラーガとタートルのいのちは
 新しい皮膚細胞と合体し痛み^{いたみ}の振動になった
 音がうねる 刺さる
 左手で右の腕をかかえこみ蹲^{こたむ}っても
 肘から肩へ頭へと受け入れた海は鎮まらず
 波は強くなるばかり
 一瞬自分を失ったとき
 波間をよぎる魚の群を見た
 それは聖なるガンジス河の水と共に

インド洋の黒潮にのってやって来て
水平線上に沈む陽に染まったターラの魚たち
ふとラーガの海に浸した手の表皮から
時空を越えてすばやくはいりこみ
熱情の尾びれをはねあげ
腹をくねらせて細胞と交合したのだ
魂がふるえ歓喜することが痛みとなる残酷さ
耳をふさぎ音をさえぎっても
皮膚は感応し音を聴いている

耳の不自由な人たちが
大きな風船を両手で抱いて
演奏を聞いているのをみた
掌が音を受けとめ震える
耳というオルガンがなくなるとも
目で指先で足裏で音を感じている

今わたしの手の甲も

*1 ラーガ||インド音楽の旋律
*2 ターラ||インド音楽のリズム